



掲示板 ニホンアカガエル・イタチ・ライギョなどの観察写真も

■ 軽井沢では

私が、生まれ故郷である軽井沢に戻ったのは40年ほど前だが、当時「使い道のねえヤチなんてものは建設残土で埋めちまえばいくらでも使える。」なんて言葉を聞いたことがある。ヤチは、谷津や谷戸、谷地という丘陵地が浸食された谷状の地形を指していたのではなく「湿地」の感覚だったかも知れない。

今でこそ生物多様性を重視する視点から、ことに都市部では希少な生態系に目が向けられているが、軽井沢の「ヤチ」はどうか？

多くの研究者によって軽井沢の湿地生態系の希少性や貴重さが訴え続けられてきたが、残されたものはほんのわずかとなってしまった。我孫子のように、行政とボランティア団体との連携とともに地域住民の関心呼び起こす活動を模索せねばならないと強く感じている。

会員 須永 久

谷津ミュージアム案内図



植物標本事始め ①

植物標本の始まり

軽井沢サクラソウ会議の有志が、植物標本づくりを始めたのは2011年です。『もう一度見たい！軽井沢の草原・湿原』の贈呈をキッカケにご指導いただけるようになった津田智先生が、「標本も作ってみたい？」と言ってくださったのがキッカケでした。



2011年 最初に標本の作り方を津田先生に教わる

名前も覚えよう

日本自然保護協会の自然観察指導員講習会に参加して、「自然観察会で名前だけ教えても自然保護には結びつかない。」と言われました。確かに名前だけ覚えても、その動植物がどんな生活をしているのか、どんな場所に住んでいるのか、どんな食べ物や環境が好きか、知らなければ、その自然環境を大切にしたいという気持ちにはなりませんね。

でも、小学校に入学して知らない子たちと会った時に、その子の名前を覚えて、あだ名で呼びあえるようになって初めて仲良しになれるように、動植物の名前を覚えて仲良くなることも、とっても大切なことだと思います。

3分の1の種

最近読んだある図鑑の「はじめに」に、「約3分の1の種を覚えてしまえば、あとは水が流れるように楽に進むことを知っております。」と書いてありました。軽井沢の植物の3分の1の植物について名前を知って仲良くなりませんか。

植物標本を作ろう

名前を覚えるには植物標本を作るのが一番の早道です。私も、最初のうちは、コゴメウツギを何度も標本にしてしまっ、津田先生に「どうして

コゴメウツギの標本がこんなに沢山あるの？」とあきれられてしまったことがあります。

道で白い花が咲いているのを見つけて、「これも標本に採っておこう！」と思って採っても、よくよく見ると同じ植物だったのに気が付きます。今でも、そんなことの繰り返しです。

図鑑の使い方・グループで調べよう！

標本の名前を調べるために図鑑を読んでいると、その植物の特徴と同定（正確な名前を知る）のポイントが丁寧に書いてあります。『日本の野生植物』が現在、日本で一番詳しい図鑑です。（中軽井沢図書館にあります。）色々な植物には、その植物特有の部分の名称があって、読みなれないとチンプンカンプン！そんなときに役に立つ「お助け本」も沢山出版されています。

同定作業は、仲間とワイワイ一緒にするのがお勧めです。サ会議の標本グループに入って一緒に勉強しませんか。

専門家に見てもらおう

標本は専門家に確認していただいて、間違っていたら調べ直してみることも大切です。専門家も赤ちゃんの時から沢山の植物の名前を知っていたわけがありません。その人も、間違いを繰り返しながら勉強してきたはずですよ。

私が名前のわからない標本を大森威宏先生にお見せしたら「軽井沢では未発見のスゲだ！」と大変喜ばれたことがありました。植物標本は誰にでも作れる「自然史のための不変の証拠」（宮本太先生）なのです。必ず採集年月日、採集場所、採集者の記録を書き留めて置いてください。ゴミにならないように！

会員 今城治子



サクラソウも標本に

連載その③

農業体験という名の自然観察会をやってみた

会員 渡辺久義

「それでは今日収穫したスナップエンドウは皆さんお家に持ち帰って、家族と一緒に料理して食べて見て下さい」と話すと今日一番の大きな歓声が上がりました。一番テンションをあげていたのは引率の先生でしたが。

「では取ったスナップを一つ取り出して太陽に透かしてみして下さい」



秋田県大館市
しどき村渡辺農園

すくすくと育った
スナップエンドウ

生徒達：「わー、豆が入っている」

農家A：「豆が入っている事からも分かる通り、スナップエンドウはマメ科です。植物は光合成しますが、マメ科の植物は光合成以外にも特殊能力がありますが、何か分かりますか？」

生徒達：「…」

農家A：「ではヒントです。大気中にある気体を取り込むことができます。光合成で使う以外の気体です」

生徒達：「…」

農家A：「あれ、先生。生徒達は光合成はもう習いました？」

先生：「光合成は習いましたけど、一年生なんて何の気体を使うとかはやってないですね」

農家A：「そうですか。では簡単に言うと、光を受けた植物は水と二酸化炭素から糖分と酸素を造り出します。マメ科は根っ子についている菌と共生して、大気中にある窒素を体内に窒素分として

取り込む事ができるという特技があります。なので肥料などを抑えたり、マメ科の植物自身が肥料になる事もできます」とは話したものの、マメ科の話は生徒にはあまり響かなかった。

最後に振り返りを兼ねて、生徒の質問タイムがありました。何件か紹介して終わりたいと思います。

生徒F：「一番好きな野菜は何ですか？」

農家A：「好きな野菜が沢山あるので難しい質問ですね。季節によって旬な野菜が変わるので、四季折々の旬の野菜が好きです。ちなみ、あなたの一番好きな野菜は何ですか？」

生徒F：「ブロッコリーです」

農家A：「ブロッコリーは美味しいですよ。うちの農園でも美味しいブロッコリーを作っているのでは是非食べて見て下さい」

生徒I：「農業で一番大変な事は何ですか？」

農家A：「色々な野菜を作っているので収穫が重なるのとたくさんの量を採って袋詰めしないといけないので、その作業に追われるのが大変ですね。野菜は人間を待ってくれないので。あと栽培が一番難しいのはトマトですね」と言うと生徒達はトマトという回答に意外だという表情を浮かべていました。

生徒H：「将来、何になるのか迷っていますが何かアドバイスしてもらえますか？」

農家A：「そうですね。まずは好きな事を思いっきりやってください。自分が好きな事、得意な事を夢中になってやれば、それが自分の将来に繋がっていくと思います」

当日は、天気にも恵まれハウス内も暑すぎず寒すぎずで無事に農業体験を終了する事ができました。帰り際に、一番歓声を挙げていた先生たちにもスナップエンドウのお土産を渡して、イベントは無事に終了となりました。後日、生徒達からお礼のお手紙を頂きました。（追伸：当日の現場はもっとバタバタしていたので内容を整理・補足して執筆しました）

当集落農村の原風景は何と云っても茅ぶきの屋根のある風景である。昭和初期十数戸の姿を見る事が出来ました。夏は涼しく、冬は暖かい理想的な家だそうですね。私は住んだことはありませんが？あの萱が断熱の役目をしている事でしょう。現在の様に防寒設備が無いので、よく考えたものです。別紙にも書きましたが、当集落はぼんぼんトンネルの先に区有地ありまして、毎年四戸位に葺刈場を無償で分けてやります。分けてもらった家は、親類近所をたのんで、刈り取ります。約四年位に分けてふき上げます。又一次に分けてもらっても経費がふくのには大変かかるので。現在、区有地も売

今回は上発地では屋根葺き用のススキを刈り取る草原を共同で持っていた、というお話です。
半自然草原は飼料、屋根葺き資材を調達する入会地でした。昭和二十九年発行『軽井澤町志 歴史篇』には、1663(寛文三)年に上州西牧村から百姓衆が萱を刈りに侵入し、馬十疋と共に取り押さえられたという事件も載っています。

られ、ゴルフ場になっておりません。又萱葺等の材料が手に入らないので、寺等はトタンを掛けてあります。昔の原風景は消えていきます。葺でふいた屋根を当時は「くず屋根」の家と云っています。
馬と一緒に生活していたので、入り口はすごく大きな戸です。入ると5m位の土間があり、左には馬が、右には板の間。いろりを中心に食堂、そして作業所、物置です。馬を飼っている家は、大きく農業をする家で、馬を飼う家は、集落でも1/3位です。一緒に食事をする馬は本場に可愛く家族の一員です。
軒下には必ず兎が、二、三匹、箱をならべてあり、兎に「えさ」



草刈り場の地図

をくれるのは子供の仕事です。可愛そうなのはその兎です。大きくなるのを楽しみに毎日草をとりあたえていたのを、十二月になると皮を買取り肉は正月用に残していきます。軒下に二、三匹の皮をはがれた兎がさかさにつるされているのを見ると涙が出る思いです。生活のためにしかたないでしょうが。
庭には四、五羽の鶏が外で飼育され、自家用の卵が利用されます。鶏もよくしたもので、日は庭先でえさをついばんでいます。夕方になると小屋に入り、卵を産みます。小屋にはヤギ、羊等もいて、何でも自家用。ほんとうにのどかな農村風景がみられる。私が家でも羊を二頭飼って、農協で刈った毛を布にしてもらいスーツを作った事もあり、なつかしいです。

事務局から

■上発地の共有地のように、「近世の農村でなぜ共有地が必要だったのか」というと、個々の世帯では補いきれない集落の経済活動があったからです。
(中略) 共有地には社会として生きる知恵が集まっているということ、研究を通じて知ってい

ました。」(朝日新聞 湯澤規子氏の発言から)
軽井沢町の開発のスピードを見ていると、個々の団体では対応しきれない課題に対して、共有の課題として対応する「生きる知恵」が必要ではないかと思う今日この頃です。